

東京・春・音楽祭 2021

東京春祭 歌曲シリーズ vol. 28



マルクス・アイヒェ (バリトン)

& クリストフ・ベルナー (ピアノ)

曲目解説

ブラームス：ティークの「マゲローネ」によるロマンス

ブラームスは23歳の時、バリトン歌手ユリウス・シュトックハウゼンと知り合った。彼はブラームスの歌曲のよい伴侶となり、この連作歌曲集を作曲する動機をもたらした。最初の6曲は1861年に着手し、1865年に2冊に分けて出版され、残りの9曲は1869年に出版されて、シュトックハウゼンに献呈された。同年にはブラームスのピアノ伴奏とシュトックハウゼンの歌唱によって初演された。

テキストとなったのは、19世紀ドイツ・ロマン派の作家ルートヴィヒ・ティークの作品だが、マゲローネの説話そのものは古く、中世ヨーロッパにまでさかのぼる。ティークの原作は全18章で構成され、各章にはそれぞれ1篇の詩が挿入されている。ブラームスはその中から15篇の詩を選んで作曲した。第10曲と第13曲にはそれぞれ「絶望」「スリマ」という原詩にはない表題がつけられている。

物語は、美しきナポリ王女マゲローネと、プロヴァンスの伯爵ペーターとの様々な冒険に彩られた恋物語。まず**第1曲**は、ペーター伯爵に向けて、とある吟遊詩人が諸国遍歴の旅へと誘う歌。**第2曲**は、その歌に鼓舞されて旅立ったペーターの勇ましい決意。**第3曲**は、旅の途中、ナポリで催された馬上試合で見初めた美しき王女マゲローネに恋焦がれる情熱的な歌。**第4曲**は、ペーターがマゲローネの乳母に託した歌で、王女への熱烈な愛を告白する。**第5曲**は、ペーターからマゲローネへの2通目の恋文。時に疑心暗鬼になり、激しく揺れ動く恋心を歌う。**第6曲**では、初めての逢引きの約束を取り付け、歓びを抑えきれないペーターが、何とか心を鎮めようとする。**第7曲**は、幸せな逢瀬を思い返して、自室でリュート片手に恋の陶醉感に耽る。しかし**第8曲**では、恋敵が現れ、恋の成就も風前の灯火となった二人は、駆け落ちを決意。ペーターは愛用のリュートとの別れを惜しみつつ、明日へ希望をかけて歌う。**第9曲**、駆け落ちに成功してナポリを出た二人だったが、途中でマゲローネが疲れてしまい、ペーターは彼女を木陰に休ませて子守唄を歌う。**第10曲**では、マゲローネに贈った指環を鳥がかすめとってしまう。それを追いかけてペーターは舟で海へと漕ぎ出すが、運悪

く嵐に遭って、マゲローネと離れ離れになり、深く絶望する。**第 11 曲**、取り残されたマゲローネはさすらいの旅を続け、とある山小屋の老夫婦のもとに住み込む。そこで紡ぎ車を前に寂しさを嘆く。**第 12 曲**では、ペーターは難を逃れて、さるスルタンの庭番となる。彼はマゲローネを想い、あらためて別離の悲しみを歌う。**第 13 曲**は、ペーターを慕うようになったスルタンの娘スリマが、彼に切々と想いを伝える。**第 14 曲**で、マゲローネへの想いを断ち切れないペーターは、駆け落ちしようと誘われたスリマをかわして一人、舟で脱出する。**第 15 曲**は、ついにマゲローネとの再会を果たしたペーターが、永遠に変わらぬ愛を誓う。